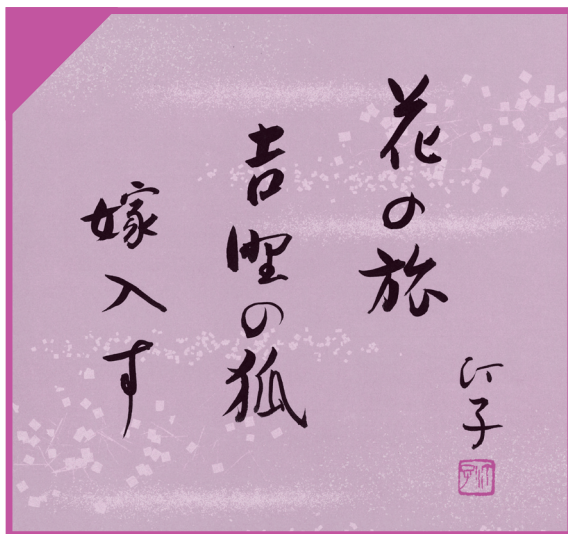


詠 詠 集

八 月 号



花鳥諷詠®



令和4年8月■第413号 ————— 目次

花鳥諷詠選集	岩岡 中正	2
	瀬在 光本	4
報告 第三十五回通常総会		7
献 句		8
虚子研究 『六百五十句』 研究 (30)		13
この人の作品	多田羅紀子	19
一頁の鑑賞	長谷川禎子	20
	西田 梅女	21
虚子研究 虚子宛書簡を読む (三十七)		
明治二十五年九月十三日 池内政忠書簡 (封)		
	小田 直寿	22
虚子を語る 浜崎素粒子氏		24
新刊紹介		29
風報		30
地区行事開催日程表		31
編集後記		32

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

花鳥諷詠選集

岩岡中正選

特選五句

囀の大樹伐られてしまひけり

横浜 黒山 敏恵

一枚を脱ぎ耕人となりにつけり

荒尾 大川内 みゐる

平和とは広がつて行く植田かな

四国中央 豊田 耕造

聞くほどに皆同い年山笑ふ

芦屋 門脇 重子

指先を目にして小さき種を蒔く

渋川 今井 夢子

二句短評

一句目——俳句は「省略」の文学。「囀の大樹」が伐られて、その鳥語、新緑の葉も幹も風もいのち一切も、大樹にまつわる、村の記憶・歴史・物語も皆失われた。自分のいのちまで断たれたような悲しみである。

二句目——これも省略を尽くした、瞬時に耕人の姿が見えるような印象的な句。「一枚を脱ぎ」の発見が的確で、黒々とした春の畑に力をふるうたくましい人の姿に、春のいのちの輝きが見えるリズムカルな句。

入選六十句

玻璃越しに祇園法被に囃さるる

朝倉 浅川 走帆

遠き忌の弟にも武具飾りけり

鹿児島 平山 洋子

蜃気楼ゴビの砂漠にニューヨーク

成田 小川 笙力

青麦や大地大きく脈を打つ

高松 岩田 賀代

耕して田の魂を呼び戻す

福山 廣本 貢一

ふるさとの兄老いにけり葱坊主

白岡 小林カヨ子

打ちならし三味線草の日暮どき

鹿児島 所崎 玲子

料亭の歴史を灯す門脇

大津 伊藤 薫

青空をぐんぐん攻めて山若葉

神戸 片岡 橙更

その色の初桜てふ生まれたて

福岡 大石 靖子

悲しみを着替へる為の更衣

神戸 玉手のり子

菜の花や別れの角に来てしまふ

柏原 鈴木 輝子

見はるかす山川万里夏に入る

金沢 瀬古 祥子

鴨帰る心一途に振り向かず

倉敷 鴨井 愛子

蹲踞に少し夏足袋濡らしけり

富山 片桐 久恵

句碑一基残花の情をまとひ立つ 鳥取 棕 誠一朗
 行春や胸に大きな穴一つ 山形 布川 國雄
 菜の花黄幸はふ色でありにけり 福岡 今中 榮泉
 汀子師の選も果てたり春惜む 長岡 安井 里子
 園児らの指さし歌ふ鯉のぼり 大分 野村香代子
 行春を惜み大きな師を惜しむ 柏原 早川 水鳥
 遍路鈴鳴らして潜る仁王門 高松 岡田 貞幹
 教会の扉は重し花の冷 始良 五反田加代
 天領の日田を貫く春の川 太宰府 江里口幸生
 ウクライナロシア日本春の星 青森 長島 喜美
 初恋の文遺書となるさくら貝 和泉 橋本 晶艶
 戦なき空を自由に囀れる 福山 久保 絃子
 新緑に攻め込まれたる城下町 市原 飯塚 咲子
 昨日より今日が大切若楓 芦屋 槌橋 眞美
 薔薇園を出でて呪縛を解かれけり 名古屋 山口 勝行

鶯の声のあふるる句帳かな 四日市 伊藤 和子
 永き日を遊び尽くせし子の寢息 袋井 湖東 紀子
 夕東風や窓に灯点る星ともる 福山 広川 良子
 噴水の天辺いつも粒ひとつ 藤岡 飯塚 柚花
 耳元にソロ天上に百千鳥 静岡 堀内 智子
 食卓に薔薇一輪のあるだけで 久留米 野口 桂子
 ふらここを飛び出しさうに漕いでをり 西予 渡辺 孝子
 葉桜に偲びて余り有る人を 東海 夏目 惇子
 豆飯や一汁一菜あれば足る 北九州 篠原 綾野
 山内の風は声明花吹雪 高松 岡 悦子
 母の日や母永遠の道標 飯塚 馬場美智子
 ただ歩くだけで弾んで風薫る 岡山 伴 明子
 存分に甘えて母の日の母と 洲本 高野 さち
 更衣汀子先生青が好き 神戸 内田 泰代
 皆同じ春愁を抱き集ひけり 香川 三宅久美子

● 瀬在光本選

特選五句

光芒の先へ落花の頻りなる

高松真鍋孝子

行春や休業のまま閉店す

高松浅野クニ子

行春を惜み大きな師を惜しむ

柏原早川水鳥

磯浪の大きく崩る虚子忌かな

宇佐磯永喜八郎

行々子少し黙つてくれないか

久留米平岡清志

二句短評

一句目——暗闇に差し込む一筋の光りのほさに桜の花びらがひとひらずつ次々と舞い落ちる。

そんな美しい映像シーンが想起させられ静寂の中に彩が浮き立つ句として鑑賞できる。

二句目——二年余続いているコロナ禍で休業を余儀なくされた店主があれこれ悩んだ末にやはり閉店しようと決断せざるを得なかった苦勞が推し量れる。

「行春」の季節が愛惜の念を一層引き立たせている。

村一つ湖底にありて桐の花	三木内田幸子
又の世も母子であたし母子草	たつの竹内澄子
役職を辞すと決めたる更衣	明石駿河亜希
行々子少し黙つてくれないか	久留米平岡清志
柏餅少年らしく育ちたる	加古川長谷川美幸
美容院出て春風の交差点	糸島藤原泰子
配属の部署へ挨拶緑さす	神戸長谷元子
麦秋や叩いて捏ねるパンの生地	熱海西島ちはる
樟の森歩く憲法記念の日	鹿児島松尾あやめ
真つ直ぐに生きて真直に麦熟るる	熊本児玉胡餅
樟さして麦秋分つ川下り	大牟田藤好信子
お揃ひのリユック並べて春の草	大分峯戸松祥子
抱けと泣く児のずつしりと薄暑かな	伊賀池本準一
水門を開けて一村夏に入る	大分福岡ただし
存問の花の心に旅立たれ	宇部爲近正子

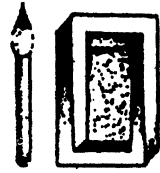
入選六十句

遠き忌の弟にも武具飾りけり 鹿兒島 平山 洋子
 春雨や時々零れくる鳥語 高崎 清水 教子
 花を見に出てきしことに心足る 高松 肥塚 英子
 物惜しみしては惑へる更衣 米原 成宮 伯水
 搔き消さる知床の海卯浪荒る 西宮 宮本 露子
 帰省子に無人駅舎となりし里 大阪 大川 隆夫
 耕して田の魂を呼び戻す 福山 廣本 貢一
 朧夜の包みきれざる星の数 松原 加藤 あや
 その色の初桜てふ生まれたて 福岡 大石 靖子
 落花その中のひとひら母の計は 鳥取 石尾 正子
 鄙に住む不便は言はず柿若葉 羽生 蓮見由美子
 一枚を脱ぎ耕人となりにけり 荒尾 大川内みのる
 逃げまどふ戦火の地あり子供の日 東京 庄嶋 里子
 汀子師の選も果てたり春惜む 長岡 安井 里子
 翡翠の発つや連写の音が追ふ 立川 日置 正樹

潮騒は人待つ調べ夏に入る 千葉 藤田 考成
 戦無き空晴れ渡り石鹼玉 金沢 中島 外岐
 更衣軽くなりたる足捌き 高知 前田まこと
 道づれを得ては別れて花の山 福岡 井野 弘子
 真つ直ぐな君また偲ぶ聖五月 佐賀 古庄たみ子
 移民史を繙く波止や卯浪立つ 神戸 小柴 智子
 高々と妙高の風鯉幟 上越 藤井 敏子
 母の日や老いたる母の顔知らず 福岡 下原口允子
 星の綺羅まとひ海亀上陸す 徳島 奥村 里
 食卓に薔薇一輪のあるだけで 久留米 野口 桂子
 春潮や隠岐見ゆる日の吉となす 鳥取 砂流 育子
 春休み疲れを知らぬ子に疲れ 宇佐 尾崎 陽子
 足下に春の海光坂の町 神戸 涌羅 由美
 存分に甘えて母の日の母と 洲本 高野 さち
 書に籠り卯の花腐しとて楽し 相模原 後藤 慶

葉の色と紛ふ実梅の青さかな	岡山	長江	康子
一切を知らぬ子猫を抱き上ぐる	福岡	吉田	文代
何処となく自肅ごろの花見かな	久留米	矢野	愛子
後を継ぐ覚悟の背なや田を植ゑる	西予	末光恵美子	
遊漁して釣りし夏鰯抱へ来し	石川	宮下	末子
野仏にいつもの祈り風薫る	千葉	鈴木真沙枝	
薔薇似合ふ募る思ひ出師の笑顔	能美	早瀬	貞子
しなやかなことも強さよ若楓	姫路	上原	康子
一村の代田に水のゆきわたり	木津川	松山	寿美
花ミモザ大泣きの子に笑みの医師	大阪	酒井	湧水
びゅんびゅんと干し機の回る烏賊の町	長崎	伊藤ひとみ	
咲くよりも落ちて華やぐ椿かな	山形	加藤わか子	
つつしみを日ざしに満たし花すみれ	調布	吉田有輝子	
散りて知る命の重さ白牡丹	神戸	明石	裕子
柏餅少年らしく育ちたる	加古川	長谷川美幸	

投函の音たしかめる五月晴	長野	田中	延子
指先を目にして小さき種を蒔く	渋川	今井	芑子
白日傘傾げ内緒の話かな	松山	門田	智子
梨の花こころもとなき恋をして	熊本	平山紀美子	
青芝に白球跳ねる同点打	さいたま	太田	野風
麦秋や叩いて捏ねるパンの生地	熱海	西島ちはる	
羽音寄せ黄金の蕊を抱く牡丹	西宮	山之口倫子	
まろまろと漲る命袋角	芦屋	奥田	好子
大磐を抱き寄せ三葉躑躅咲く	米子	前田	千
八十路には八十路の誇り娑羅双樹	宮崎	南	瑛子
明日もつく紙風船を折り畳む	宮若	菅井久美子	
花衣俳句の風をまとひ逝く	川崎	高原	沙織
抱けと泣く児のずつしりと薄暑かな	伊賀	池本	準一
水門を開けて一村夏に入る	大分	福岡	ただし
夏の灯や沖の釣舟動かざる	鹿児島	森	志覚



編集後記

夏瘦の目立たぬ服を着て行きぬ

汀子

昭和二十九年夏の句です。お若い頃の汀子先生はほっそりとしていたと、往時を知る方々は口をそろえて、笑いのようにおっしゃいます。ふくよかで威厳に満ちた会長しか知らない者にとっては若き女性の氣遣いに満ちた句に共感し、うらやましくもあるのです。

●7ページで報告したように第35回通常総会、三年分の協会賞・花鳥諷詠賞の授賞式、そして稲畑汀子名誉会長追悼会は、無事終了しました。想定以上の参加者があり、メイン会場のほかにビデオ映像でつないだサテライト会場を設置しました。これは、関東支部の若手会員を中心としたチームの尽力によるところが大きく、ただただ感謝しありません。

●同じチームで井上泰至常務理事によるリモート講座も開催。お試しのつもりでしたので二十人集まればいいと思っていたところ三倍近くの方に受講していただきました。参加申し込みもカード決済やコンビニ支払いができるようにしたのは大きな進歩だと自画自賛しております。

もう少し先になるかもしれませんが

俳句カレンダーの販売や協会賞の投料などの支払いにも応用できればよいと考えています。少しずつですが、便利になるといいですね。

須川 久

花鳥諷詠八月号(通巻第四一三号)

定価二五〇円 但し、本代は年会費を含む

年会費一〇、〇〇〇円

令和四年八月一日

発行人 岩 岡 中 正

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151 0073 東京都渋谷区笹塚二一八九

シャンブル笹塚二一B一〇一

電話 〇三三四五五五一九一

FAX 〇三三四五四五一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一六〇七二八六八二〇

印刷所 日本ハイコム㈱

〒112 0014 東京都文京区関口一一九一二